広報 すぎなみ
Suginami
みどり豊かな　住まいのみやこ
11/15
令和5年（2023年）
No.2366

劇場に来る楽しさを座・高円寺から発信。

舞台公演をはじめワークショップの開催など演劇に関わるさまざまな取り組みの中心地となっている杉並芸術会館（座・高円寺）。今年7月に同館の芸術監督に就任したのは、演出家・脚本家・俳優として活躍するシライケイタさん。公共劇場が果たすべき役割、座・高円寺で実現したいことなどを伺いました。

特集
すぎなみビト

杉並芸術会館（座・高円寺）芸術監督
シライケイタ

〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1 ｜ 3312-2111（代表）FAX 3312-9911（広報課直通） ｜ 区ホームページ：https://www.city.suginami.tokyo.jp/ ｜ 発行：杉並区 ｜ 編集：広報課

「広報すぎなみ」は月2回（1・15日）発行。新聞折り込みでの配布のほか、区施設・区内各駅などの広報スタンドに置いています。入手が困難な方には個別配布をしています。ご希望の方は、電話・ファクス・Eメール・LoGoフォームからお申し込みください。

詳細は、区ホームページ（右2次元コード）をご覧ください。

シライケイタ　昭和49年東京都生まれ。桐朋学園芸術短期大学で演劇を学ぶ。在学中に蜷川幸雄演出「ロミオとジュリエット」のパリス役で俳優デビュー。その後、野田秀樹・木村光一・鐘下辰男など、数々の演出家の舞台に出演。平成22年、劇団温泉ドラゴン旗揚げ公演に戯曲を提供。以降、同劇団内外で数々の脚本・演出を手がける。文化庁・一般社団法人日本演出者協会主催の若手演出家コンクール2013にて優秀賞と観客賞を受賞。第25回読売演劇大賞において杉村春子賞を受賞。座・高円寺では、令和2・4年の座・高円寺レパートリー・ピアノと物語「ジョルジュ」に出演。

杉並から演劇文化を広げ、日本を代表する作品を生み出したい

小学生のときに届いた谷川俊太郎さんからの詩の手紙

―演劇の世界に進んだのはなぜだったのですか？

小学生のときには「俳優になりたい」という気持ちがありました。きっかけの一つは、劇場に芝居を見に行く機会が多かったこと。親の友人が劇団で俳優をやっていて、よく家にチケットを売りに来ていたのを覚えています。劇場に行った僕にとって興味があったのは、華やかな舞台上よりも、舞台袖の闇の奥。表に見えているところはどこか嘘くさい気がして、見えていないところにリアリティーを感じて、「あの闇の向こう側を知りたいな」と漠然と思っていました。

―幼い頃から演劇に触れる環境にあったのは大きいですね。

あともう一つ、俳優を志すきっかけになった出来事があります。小学6年生のとき、国語で谷川俊太郎さんの詩「生きる」を読んで、自分でも詩を書いてみるという授業があって、僕は谷川さんに手紙を書くような気持ちで詩をつづっていきました。どうして魔法のような詩が書けるのか？　谷川さんは心の目が僕よりも大きいのですか？　と。すると、担任の先生がそれを谷川さんに郵送してくれて、後日なんと「けいたくんへ」という詩で返事が届いたのです。その詩は今でも本当に宝物なのですが、詩の中に「人にはできることとできないことがあります。ぼくはたまたま詩を書くように生まれついたのです」という言葉があって、この言葉が小学生の僕にはとても刺さったんですね。じゃあ僕は何をするために生まれついたのか？　と問いかけたとき、「俳優だ」と目が開いた。そこからは一目散に俳優になる道に向かっていきました。

理想と現実の間で抱いた猛烈な葛藤を脚本に

―俳優としての活動をスタートしたのはいつですか？

大学で演劇を学び、在学中に蜷川幸雄さんの舞台「ロミオとジュリエット」で俳優デビューしました。その後もさまざまな演出家の舞台に出演して、順風満帆にいくとばかり思っていたのですが、そんなわけにはいきませんでしたね。俳優としてなかなか大きく跳ねる機会がないまま、20・30代は理想と現実のギャップに非常に苦しみました。そんな中、36歳のときに初めて脚本を書きました。

―脚本を書き始めたきっかけは何だったのでしょうか？

20代で俳優デビューしてからは、俳優としてオファーやスケジュールを「待つ」時間がとても長く、「待つ」という生き方はもういいかなと感じたんです。それならば同じ演劇の仕事でも脚本を書くことの方が、より能動的な生き方になるのではないかと考えました。そんな頃、ちょうどバイト仲間が劇団を立ち上げるのに旗揚げ公演用の脚本を探していると話していて、酔っ払った勢いで「俺が書こうか！」と約束してしまって。それが劇作家としての始まりです。

―多くの脚本を手がける中で、特に印象深い作品はありますか？

デビュー作は酷評を受けて散々だったのですが、次に同じ劇団のために書いた「BIRTH」という作品が、僕にとっては転機となりました。同作は、底辺からはい上がりたい男たち4人の物語。僕自身が理想と現実のはざまで抱いてきた猛烈な葛藤。ここではない世界へ行きたい、違う自分になりたい、そんな思いをそのまま文字にしていったような作品でした。これが評価を得て、韓国のソウルで一週間公演したり、戯曲賞を受賞したりと話題になり、5年近くにわたって上演され続けるヒット作になりました。自身にとっても忘れられない作品です。

―経験や年齢を重ねて、作品のテーマが変わってきたと感じますか？

最初の何作かは、自分の内に抱える葛藤や将来への不安がそのまま劇作のテーマになっていました。だから自然と、舞台の底から空を見上げるようなシーンが多かったです。脚本を書き始めて十数年がたち、今はもうその頃と同じギラギラしたものはありません。でも当時のハングリー精神が完全になくなったわけではなく、成熟して、また違う形に変わってきているのではないかと感じています。

コロナ禍で思い知った演劇界の現状を変えたくて

―今年7月に杉並芸術会館（座・高円寺）の芸術監督に就任しました。芸術監督とはどんな役割なのでしょうか？

元々、芸術監督という役職は、ヨーロッパの王立劇場が発端といわれています。劇場の芸術面の演出だけでなく、予算・人事・企画などを一手に任されていた人です。日本ではまだなじみのない役職なので、多くの公共劇場が芸術監督の役割を探求している過程ではないでしょうか。僕自身は座・高円寺で、大きな方針やカラーを打ち出す部分はしっかりと担いながら、劇場スタッフと共にさまざまなことを議論し、決めていきたいと考えています。

―芸術監督の公募に挑戦しようと思ったきっかけは何だったのですか？

新型コロナウイルスの感染拡大で2年4月に緊急事態宣言が出て、演劇業界では突然芝居ができなくなる状況に陥りました。僕の劇団も本番直前の最終リハーサルまでやって本番は中止。こんなに理不尽で、現実とは思えないことが実際に起きるのかという気分でした。そして、仕事を失った演劇人たちが国に対して補償を求めると、今度は世間からの逆風がすごかったんです。名だたる演劇人が声を上げてもその風潮は変わりませんでした。補償を求める署名活動が始まっても、映画や音楽業界は瞬く間に何十万筆と集まるのに、演劇業界はすごく頑張っても数万筆。そんな現実を目の当たりにして、「本当に演劇文化は知られていないんだな。想像以上に演劇文化の土壌が育っていないんだな」と痛感した経験が背景にあります。

―演劇文化の現状を知ったことが根底にあったのですね。

でも一方で、ミニシアターやライブハウス文化に関わる人たちと協同して、文化芸術への公的支援を求めるプロジェクトを始動し、地道に活動することで形になっていくという経験もしました。人々が動くことで、世の中は変わっていくのだと実感できた。文化の土壌をつくっていくこと、さらにその土壌を広げていくことは、一人のアーティストだけでできることではないかもしれない。でもそこに関わる人たちが束になって取り組んでいけば、変えていくことはできるかもしれない。そんな思いが生まれました。まさに公共劇場とは、そういった活動を実践していく場所です。地域に演劇文化を根付かせることを目指す座・高円寺で、自分一人では限界がある「演劇文化の土壌づくり」に貢献できるのではないかと考えました。

―芸術監督として座・高円寺で実現したいことは何ですか？

座・高円寺では既に先進的な取り組みがたくさん実施されていて、例えば地域の子どもに演劇を届けたいと考えていたのですが、杉並区では既に区立の小学生がここで演劇を体験していますよね。この場所で演劇に触れ、成長して戻ってくるという現象も起きています。だから僕がやるべきことの一つはまず、ここで実践されていることを他の地域にも伝えていくこと。さらにもう一つ実現したいことは、この場所から日本を代表するような作品を生み出すことです。

―どんな作品が座・高円寺から生まれるのかとても楽しみです。

昨今は新作ばかりが求められ、作品が使い捨てられているような状況にあります。そんな中でも座・高円寺は、一つの作品を何年間も公演し続けている貴重な場所です。それはつまり、それだけ強度の高い、素晴らしい作品を作る必要があることも意味しています。「座・高円寺ではすごい作品をやっている」と憧れを持ってもらえる、役者にとっても作り手にとっても刺激となる、そんな芸術作品を作っていくことを目指していきたいです。区民の皆さんやスタッフの皆さんと手を取り合い、この場所が演劇文化の中心地になっていくことを期待しながら、芸術監督として貢献していけることを楽しみにしています。

シライケイタ×演出とは？

俳優一人一人にとってのベストな演技を一緒に探していく！

演劇でいう「演出」は、そもそも英語の「ディレクション（direction）」から翻訳された言葉。また、映画界ではディレクターを「監督」と訳すので、映画監督のような仕事だと想像してもらうと分かりやすいかもしれません。

僕が考える演出の役割とは、作品に関わる人の能力を最大限に引き出すこと。俳優に対して「こういう演技をしなさい」と指示することはほぼありません。一緒に作り上げていく過程で、自分の想像しなかった場所にたどり着くことが「演出」の醍醐味（だいごみ）だと思っています。

俳優をはじめ、美術や音楽、各自のベストを擦り合わせて舞台は作られます！

すぎなみビト…区内外で活躍する区民などの紹介を通して、地域の魅力を発信していきます（毎月15日号に掲載）。